HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	分詞構文の主語と「意識条件」(awareness condition)について : 経験者の優位性
Author(s)	葛西, 清蔵
Citation	北海道大學文學部紀要, 45(2), 63-78
Issue Date	1997-01-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33677
Type	departmental bulletin paper
File Information	45(2)_PL63-78.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学部紀要 45-2 (1997)

分詞構文の主語と「意識条件」(awareness condition) について

～経験者の優位性～

葛 西 清 蔵

1．本稿はつぎの1.a，2.a の許容性と関連性について論じようとするものである。

1.a Pictures of himself$_i$ don't bother John$_i$.
b * Pictures of himself$_i$ don't portray John$_i$ well.
Belletti/Rizzi (1988)

2.a Having just arrived in town, the main hotel seemed (to Bill) to be the best place to stay.
b * Having just arrived in town, the main hotel collapsed on Bill.
Williams (1994)

1.a の文は，いわゆる心理動詞の場合には逆行の再帰化ができるが，1.b の心理動詞以外の場合には，それができないことをいい，2の文は「分詞」の意味上の主語が，主文と別であっても，主文の動詞が seem のようなものであれば，許容される文となるというものである。

1.a の文では，心理動詞のときには，なぜ再帰化ができるのか，また2.a の文では，動詞が seem になっただけで，(しかも to Bill がないときにすら)なぜ許容されるのか。一見関係のないようにみえるこの二つの現象はきわめて深い関係があり，それは「経験者の意識上の優位性」ということの二つのあ

らわれにすぎないのではないかと思われる。以下，その関係を明らかにしようと思う。

2．はじめに，1.a の許容性について考えてみる。Postal (1971：24) は，逆行の代名詞化について，「はっきりしない性質の独立した原理」に支配されているといい，Wilkins (1988：212) は再帰形には「統語的な扱いは不十分」で，「主題構造 (thematic structure) を考える必要がある」という。それでは，1.a の逆行の照応現象はどんな原理に支配されているのであろうか。

まず，心理動詞についてみよう。心理動詞には，心理作用をおこさす項と，心理作用がおこる項，つまり「心理的出来事・状態を経験する個人」(Postal 1971：49，Levin 1993：189)が必要であり，この項は please，worry などの心理作用をおこせる「意識の主体」(subject of consciousness) (Zbiri 1989：697，705) で，ある状態を非意図的に，つまり受動的に経験するもの，経験者 (experiencer) の役割をもつものでなければならない。これは，与格としてあらわれる (Perlmutter 1979：177，cf.Pesetsky 1995)。これを Cresti (1991：59)は，「意味的には，心理動詞は経験者と主題 (Theme) の項をとる，行為者なしの述語」と定義している。

それではつぎに，これにかかわる逆行照応を心理動詞の例文からみていくことにする。(以下では，心理動詞とそのとる項が英語と平行関係にあると思われるイタリア語の例も参考にしながら議論をすすめる。)

3.a Each other's health worried the students.

b *Each other's friends murdered the men. Belletti/Rizzi (1988)

c *Each other's parents harmed John and Mary.

d Sa propria$_i$ salute preoccupa molto Osvaldo$_i$.
'Self$_i$'s health worries very much Osvaldo$_i$.' Sells (1987)

e Questi pettegolezzi sudi sé$_i$ preoccupano Giani$_i$ più diogni altra cosa.
'This gossip about himself worry G.more than anything else.'

Cinque (1990)

まず，3.a と 3.b，c の許容性のちがいは，1.a と 1.b のちがいであり，心理動詞とそうでない動詞のちがいである。許容される 3.a では，心理動詞の経験者が事実上の「先行詞」となっている。1.a にみられる逆行の照応形は絵画名詞と心理動詞の間だけにみられるものではないこともまず確認しておこう。また，3.d，e も許容されることに注目したい。つぎに，

4.a Works about herself has become easy for Mary.
b Pictures of himself are difficult for John.
c Each other's ideas were astonishing to the members of the group. Pesetsky (1987)

4.c の astonishing は心理動詞 astonish に類すると考えられるが，4.a，b について，あることが easy，difficult であるとは，それが「誰か」にとって easy，difficult であると「知覚・意識される」わけであり，ここでは，述語はいわゆる心理動詞ではないが，心理動詞とおなじ現象がみられる。心理動詞に類する形容詞，tough 移動をおこせる形容詞にもみられる現象であり，何らかの形で心理的に知覚・意識する主体，つまり経験者が含意されており，それが事実上，逆行照応の「先行詞」となっていることが重要である。

5.a Each other's remarks made John and Mary angry.
b These stories about herself made Mary nervous.
Pesetsky(1995)
c ??Pictures of himself made John famous. Endo/Zushi (1993)

ここでは，「心理動詞」が，'make～angry'，'make～nervous' のように，使役の動詞と心理状態をあらわす形容詞になっているが(1)，いづれも許容される文になっており，心理状態でない 'famous' では非文になっている。われ

われが問題にしている文は，「心理動詞」の問題でもなければ，「与格」目的語の問題でもない。ただ，angry，nervous と意識する主体が事実上の先行詞となっていることを確認しておこう。また，

6.a The jokes about herself$_i$ got Mary$_i$'s goat.
b Each other$_i$'s teasing really got their$_i$ dander up. Iwata (1995)

では，'get～goat'，'dander up'がそれぞれ'annoy'，'anger' (COD) の意味であるから，心理動詞であるというように語彙的であるか，どうかに関係なく逆行照応を許容するためには，ある心理状態を経験する主体である「経験者」が示されていればよいことがわかる。つぎの例では，これが間接的に示されているときにさえ許容されることを示している。

7.a Pictures of each other caused John and Mary to start crying.
b Pictures of herself used to make Sue blush. Pesetsky (1995)

7.a では，「泣きはじめる」人が，7.b では，「顔をあからめる」という感情を経験している経験者がいる。ここでも，心理動詞でもなく，与格の問題でもないことが示され，あとにくる経験者を「先行詞」として照応化されている。

以上見てきたところから，1.a の許容性は，まず「ある心理状態を経験する経験者」の存在が必要であることががわかる。また，経験者の逆行照応は心理動詞と絵画名詞の問題ではないこともはっきりする(2)。

では，つぎに経験者と照応はどういう関係にあるのであろうか考えることにする。たとえば，代名詞化には，もともと「先行詞がすでにのべられている必要はないのであって，話し手・聞き手の関心のなかで十分に優位にたっていればよい」(sufficiently prominent in the speaker and hearer's focus of attention) (Isard 1975：289) という。「優位の頂点」(peak of prominence) (van Hoek 1995：331) であること，これこそが「先行詞」となりうるとする。とすると，すでに見た一連の許容される文において，経験者はすべて逆

行の事実上の先行詞になっていた，ということは，経験者は「本来的に優位」(intrinsically more prominent) (Belletti/Rizzi1983：313，1991：144，154) なために，この経験者が，「主語として直接同定される」(directly identifiable) (Cresti 1922：81) のであり，その経験者を「先行詞」として照応がなされていることになる。つまり，その経験者の視点で，経験したこととしてのべられる (Pollard/Sag 1992：277) ことになる(3)。同一指示には，視点という概念が重要である (Harbert 1995：199) とはこのことである。(この点が，あとでみる 2.a の logophoric として許容性にかかわることになる。)つまり，ある心理状態をあらわす述語にはそれを経験する経験者と，その原因となる項が必要であるが，話し手の感情移入しやすいのは，当然心理状態を経験する経験者の方である (Kuno/Kaburaki 1977：653)。この経験者は (他の項よりも) 意識上の優位にたち，この視点でのべらることになり，これが事実上の先行詞となっているのである。しかも，これは絵画名詞にかぎるものでもなく，心理動詞だけにかかわるものでもないことを確認しておこう。これこそ，いままでみてきた逆行の照応関係をささえているものであるといえる(4)。

ところで，1.a のような文にたいする心理動詞による説明には，Kuno/Takami (1993：157，158) では，4.a，b のような反例があるため，これを不十分であるとし，5 のような，条件を提案している。

4.a A picture of himself$_i$ with a feature story in the Boston Globe gave John$_i$ a big moral boost.

b (John$_i$ regrets that he$_i$ allowed the reporter to take pictures). A picture of himself$_i$ with an Egyptian diplomat that appeared in the Boston Globe put him$_i$ in a politically awkward position. (下線筆者)

5. Awareness Condition for Picture Noun Reflexives. Use of a picture noun reflexives is obligatory if the referent of the reflexive perceived/perceives/will perceive the referent of the

picture noun as one that depicts him. Use of a picture noun nonreflexive pronoun is obligatory otherwise.

つまり，逆行の再帰形をとるには，心理動詞にかぎるのではなく，「指すものが絵画名詞の指すものを描いたものとして知覚・意識（'perceive': become aware of (COD)）されればよい」とする。すでにみてきたところから，これ自体には問題はない。しかし，4.a の 'a big moral boost' を感ずるのは John であり，4.b で 'awkward' と感ずるのは him であり，ともに，ある心理状態を経験するものがいることには違いない。この「意識条件」には，'for Picture Noun Reflexives'（絵画名詞の再帰形）という限定があるが，すでに見たような必要な条件ではないこと，またこれはさらに広い「経験者の意識上の優性」の問題の一部であり，「意識条件」の「意識」は「優位な意識」でなければならないことを指摘しておこう。

「意識条件」をささえているのはまさしく「意識上の優位性」である。心理動詞に典型的に「意識条件」があてはまるのは，心理動詞にはかならず経験者があり，それが常に意識上で優位に立つからであるといえる。

意識の最上位にあるもの（what is uppermost in the mind）がまず発せられ（Jespersen 1976：99），それが主語となることが多い（Quirk et al.1985：79)。ところが，経験者にかぎって，意識上に優位にあって，照応形の先行詞になるというように，「主題としてもっとも優位にありながら，主語として具現しない」(Grimshaw 1990：8)。これが，経験者の「おかしなふるまい」(odd behavior)（Pesetsky 1987：138）であり，「もっとも悪名たかいなぞ」(the most notorious puzzle)（Belletti/Rizzi 1988：312）とされているのである。このことが，逆行照応の問題を統語的な方法では，解決しにくくしているのである。

5．1.a，b に関連するいくつかの文により，経験者の意識上の優位性についてみてきた。つぎに，経験者の優位性と 2.a のような分詞構文の主語の関係をのべる。

Williams (1994：84, 86) は，2.a の Bill について，これは「logophoric な先行詞となり，したがって付加部を c－統御する必要はない。文の logophoric center になるには，NP は少なくとも「思考する人，知覚する人」(thinker, perceiver)，ないしはその人の考え，感情がその文によってつたえられているような人でなければならない」という。そして，その例として Kuno (1987：108) は，say, tell, ask, complain, scream, realize, feel, know, expect のような動詞の主語，worry, bother, disturb, please のような動詞，いわゆる心理動詞の「目的語」をあげている。ところが，ここには seem は入っていない。つぎの例をみよう。

10.a Giorgio mi pareva tanto nervoso da volerlo far visitare da uno specialista.
'Giorgio to-me seemed so nervous that (I) want to make him see by a specialist.' Cresti (1991)

b Gianni sembrava a Maria$_i$ essere innamorato della propria$_i$ sorella.
'Gianni seemed to Maria$_i$ to be in love with self$_i$'s sister.'
Sells (1987)

ここで，動詞 volerlo の主語は，pareva (seemed) の主語 Giorgio ではなく，mi pareva (seemed to me) の mi であることに注目しなくてはならない。また，10.b では，propria (self's) は，主語 Gianni ではなく，sembrava (seemed) する主体である Maria を指示している。たしかに，sembrava (seemed) は，10.a の mi，10.b の Maria はある意識状態の経験者となり，あとの動詞の意味上の主語の「先行詞」となっている。ここでも，いかに経験者が意識のうえで優位であるかがわかる(5)。

ここで，すでにのべたことをふまえながら，Perlmutter (1979：305) のつぎの文をみよう。(2.a も 11 としてくりかえす)。

11. Having just arrived in town, the main hotel seemed (to Bill)to be the best place to stay. (=2.a)

12.a Tornato dopo cinque anni, mi sembrava che tutto fosso cambiato.
'Having returned after five years, it seemed to me that everything had changed.'

b Prima de andare all'estero, l'Italia mi sembrava una nazione ricca.
'Before going abroad, Italy seemed a rich country to me.'

12.a の tornato (having returned), 12.b の andare (go) の意味上の主語は sembrava の経験者 mi である。11 の例文はまさしくこれら 12.a, b の例文に相当するものである。では, 11 で, Bill が明示的に示されていないときでも許容されるのはなぜであろうか。

まず, 一般に, 節がつながると「圧倒的におなじ話題」(overwhelmingly equi-topic) になろうとする傾向がある (Givon 1995：300) ということがある。11, 12.a, b では, それぞれ arrived, tornato(returned), andare(go) する主体の存在が前提される。そしてそれが, 主節の話題と共通であると期待される。これが「主題の一貫性」(thematic coherence) (Givon 1993：307), 「話題の連続性」(continuity of the topical referent) (Givon 1993：168) である。

そこで, seemed という動詞そのものが, 10, 11.でみたように, それを経験する経験者の存在を含意しており, その優位な経験者が話題となり, 分詞の意味上の話題が一貫することになる。そのとる項のうち, 経験をする人間のほうが優位にたつ。一体化 (identify) しやすいという意味では, すでに見たように経験者が感情移入をうけやすいのであって, 明示的に示されていないその経験者があたかも先行談話にあらわれたごとく, 心のなかで最上位にあるもの (what is topmost in the mind) (Kuno 1975：287) として表現される。そして,「かくれた経験者」(implicit experiencer) (Williams 1994：

86) として分詞の意味上の，しかも優位な主語になっているのである。11 で Bill がなくても許容されるのはこのためである。

これらのことは，「seem の経験者が，心理動詞の経験者以上に意識的に優位にある」ことを示してもいる。だからこそ，Postal (1971：259)は，seem を心理動詞のなかにいれ，Kuno (1987：111)が，経験者について，「含意されるだけで明示的にでていなくてもよい」(only implied and not overtly present) といっていることが，seem のこの例でもいっそうあてはまるといえる。これが心理動詞の経験者が，ほかの say などの logophooric verbs の主語と同じように，基底構造では［+logo− 1］とされる (Kuno 1987：108) 理由なのであろう。

さらに，経験者の優位性については話題 (topic) という点でも指摘できる。13 の文をみよう。

13. Gli piacciano le sinfonie di Beethoven.
him/DAT like the sumphonies of Beethoven.
'He likes Beethoven's symphonies.' Postal (1979)

これは，はっきり，'like' (please)，'think' (seem) の経験者が与格として文頭にでている 'melike〜' (I like〜)，'methink〜' (it seems to me〜) の構造を思いおこさせるものである。これらの文は，ともに問題の 1.a, 2.a の文に関係するものであることも注目しよう。文頭にでやすいということも，経験者が意識の上で優位性を示す一つの表れともいえよう。Givon (1984：151，1995：46) は，与格目的語のほうが，対格目的語よりはるかに話題になりやすいといい(6)，Grimshaw (1990：8) は，経験者は「主題としてはもっとも優位」(maximal thematic prominence) であるという(7) ことはこのことでもわかる。経験者の意識上の優位さは疑うべくもない(8)。

以上の点から，つぎの 14 のようなまとめをすることができるであろう。

14. ある心理状態をうける経験者と，その心理状態をおこさせる項の二つの項をもつ文においては，感情移入をうけやすい経験者のほうが，意識の上で優位にたち，その経験者の視点でのべられる。

このことに関連してなお一つのことを述べておく。

話し手にとって，意識の中心になる（いいかたをかえれば，感情移入をしやすい）のは，「話し手自身である」(Kuno/Kaburaki 1977：652) はずである。これで，主語のない分詞構文，いわゆる「無人称独立分詞」(impersonal absolute participle) の説明もできる。strictly speaking, considering～, judging from～などのほとんどの慣用的な表現の意味上の主語はまさしく［＋logo－１］である話し手自身であるが，これが話し手の'I'として明示的に示されることはまずない。これは，ひたすら話し手の意識にのぼりやすい，「感情移入をうけやすいものほど省略しやすい」(Kuno/Kaburaki 1977：668) からである(9)。

6．1.a にみるような心理動詞をふくむ文の照応化の特異な現象と，2.a にみるような分詞構文の主語の間にふかい関係があることをみた。一見，関係のない 1.a，2.a の文には，意識されやすさ，「経験者の意識上の優位」ということが共通にあり，この優位性をもつものが，1.では，逆行の照応，2.では，分詞の意味上の主語となっていたのである。1.で，絵画名詞と心理動詞の間に特徴的にこの現象が見られたのは，絵画名詞には描かれるものの存在がかならずが前提され(10)，それが心理動詞の経験者であることが，いっそう経験者を知覚・意識のうえで優位にしていると思われる。「意識条件」は，経験者が意識上で優位にたつことに基づいている。また，2.では，seem の経験者が，明示的にでていないときでさえ，「かくれた主語」としてふるまうわけで，「心理動詞の経験者，わけても seem の経験者の意識上の優位性」がみてとれる。

指示されるものが，おなじ文の前の位置にあるのが，最も明示的な「意識上の優位性」の示す方法であろう。よくいわれる「先行と統御」(preceed and command) は，この意識上の優位性を，構造的にもっともわかりやすく示し

たということなのであろう。しかし,「動詞をめぐる項の間の優位性を示す構造と,統語関係を示す構造とが平行しなくてはいけないという前提はない」(cf.Grimashaw (1990)。しかるに,ここでは,照応関係は意識の優位性にもとづいてなされている。経験者について,「構造的に優位にある」(structurally more prominent) とか,「(D構造の) 主語」((deep) subject) (Cresti 1992：59, 81) というのは,そこまでいいとしても,照応化したあとで,「経験者を主題よりたかい位置」に移動させる (Belletti/Rizzi 1988：344) というのは,心理動詞にかぎって移動させなければならない理由がはっきりせず,いかにも不自然であり,事実をとらえているとは思えない。これは,心理動詞の「おかしなふるまい」に対する統語的な関係を重視する統語的な辻褄あわせにすぎない。

Notes

(1) 心理動詞が使役的であるという議論については,Pesetsky (1987, 1995), Iwata (1995) を参照。これにともない,

i.a ＊The article in the *Times* angered Bill at the government.

b The article in the *Times* made Bill angry at the government.

i.a, b のちがいの問題については Suzuki (1993) を参照。

これには,'kill' を 'cause to die' とみるときにおこる問題,つまり,動詞が一つの場合と,二個の場合におこる問題と平行すると思われる。

(2) 同じ現象が日本語にもみられる。

i [$_{NP}$Zibun$_i$-ga otokonoko-ni moteru koto] ga Alice$_i$ o yorokoba-seta
self-NOM boys-among popular fact-NOM Alice-ACC pleased
'That self is popular among boys pleased Alice'

中村 (1996：142)

(3) Wecksler (1995：136) は,動詞 'appear' についてつぎのようにいっている。'The theme (i.e.that which is visible) is expressed as the subject, and the experiencer (i.e.the agent to whom the theme is visible) is

normally unexpressed and understood as the speaker or the point-of-view of the discourse.'

(4) 心理的に優位なものが先行詞になっているという点では，

i.a Books about oneself never read poorly.

b Letters to oneself compose quickly.

i.a，b の oneself について，Stroik (1992：130，131) が，'some empty argument that syntactically licenses the anaphors' といっているのも興味ぶかい。

また，Postal (1971: 87)は，

ii.a Henry is annoying to me.

b I am amused with (at, by) Henry.

ii.a について，ii.b との関係で，'underlying logical subject' という言葉を使っていることも注目してよい。

(5) 経験者の優位性は，英語，イタリア語ばかりではなく，アイスランド語にもみられるようである。

i. ?af því að méer$_i$ léikaði stéulkan áan þress að PRO$_i$ vilja það.
bacause me-D liked girl-the without to want it 'because I$_i$ liked the girl without PRO$_i$ wanting to.' Wecksler (1995：141)

(6) 与格の話題性については，アイスランド語，ドイツ語にもみられる。

i. Mér líka eir bílar.
me-Dat like those cars-Nom
'I like those cars.'

ii. Mir gefallen diese Damen.
me-Dat please these-Nom ladies
'I like these ladies.' Wecksler (1995：140)

cf.Givon (1995: 92)

(7) 話題としての経験者の優位性については，はやくは Jackendoff (1972：148) にみられる。そのほかに，Grimshaw (1990：9，16，28) も参照。

(8) Collins (1995：40) では，Thompson (1990) (未見) の'indirect object

NPs are generaly more topicworthy than direct object NPs'との引用がある。また，Brekke (1988：172，174) で，surprisingly，seemingly のような「psychological conotation をもつ述語は，～ly をとれる」としているのも seem と心理動詞の関係を表すひとつの証左となろう。なお，与格の上位性については，Roger (1972：310) が，He looked to me as drunk. の to me, Postal (1970：41) が，remind me の me を，構造的によりたかく位置させているのも参考になる。

(9) i This is a picture of/story about/description of/joke about myself. Ross (1979：233) の，前に'I'がないのに myself と再帰形になっているこの例は，上位節 (higher clause)，'I say to you' の存在を予想させるものであるが，ここでも，感情移入をうけやすい，話し手'I'は省略の対象になっているともいえる。また，

ii Came home after the party, got undressed and went to bed.
Harbert (1995：230)

のような，日記にみられる主語'I'の脱落 (diary drop) もいれてよいかも知れない。

(10) i ??? Pictures near himself worry John. Endo/Zushi (1993：41)

この文では，'near himself' であって，himself が描かれる対象でないことに注目しなくてはならない。

References

Belletti, A./Rizzi, L. (1988) "Psych-verbs and θ-theory" *Natural Language and Linguistic Theory* 6: 291～352

----------(1991) "Notes on psych-verbs, θ-theory, and binding" *Principles and Parameters in Comparative Grammar* R.Freiden (ed.) MIT Press

Brekke, M. (1988) "The experiencer constraint" *LI* 19-7: 169～180

Bresnan, J./Kanerva, J. (1989) "Locative inversion in Chichewa: a case

study of factorization in grammar" *LI* 20-1: 1～50

Cinque, G. (1990) "Ergative adjectives and the lecicalist hypothesis" *Natural Language and Linguistic Theory* 8: 1～39

Collins, P. (1995) "The indirect object construction in English" *Linguistics* 33: 35～49

Cresti, D. (1991) "A unified view of psych-verbs in Italian" *Grammatical Relations* Dziwirekk, K./Farrell, P.E. (eds.) Mejias-Bikar

Endo, Y./Zushi, M. (1993) "Reply to Rizzi: bindidng in the minimalist program" in *Argument Structure* Nakajima, H. (ed.) Kaitakusha

Givon, T. (1984) "Direct object and dative shifting: semantic and pragmatic case" *Objects* F.Plank (ed.) Accademic Press

----------(1993) *English Grammar* 2.John Benjamin Pub. Company

----------(1995) *Functionalism and Grammar* John Benjamin Pub.Company

Grimshaw, J. (1990) *Argument Structure* MIT Press

Harbert, W. (1995) "Binding theory, control, and pro" *Government and Binding Theory and the Minimalist Program* Webelbuth, G. (ed.) Blackwell

Isard, S. (1975) "Changing the contaxt" *Formal Semantics of Natural Language* E.Keenan (ed.) Cambridge Univ.Press

Iwata, S. (1995) "The distinctive character of psych-verbs as causatives" *LA* 25: 95～120

Jackendoff, R. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar* MIT Press

Jespersen, O. (1976) *Essentials of English Grammar* George Allen and Unwin

神崎高明（1996）『日英語代名詞の研究』研究社出版

Kuno, S. (1975) "Three perspectives in the functional approach to syntax" Papers from Paracession on *Functionalism* Chicago Linguistics Soci-

ety

----------(1987) *Functional Syntax* Univ.of Chicago Press

----------/Kaburaki, E. (1977) "Empathy and Syntax" *LI* 8-4: 627～672

----------/Ken-ichi, T. (1993) *Grammar and Discourse Principles* Univ.of Chicago Press

Levin, B. (1993) *English Verb Clauses and Alternation* The Univ.of Chicago Press

中村捷 (1996)『束縛関係—代用表現と移動』ひつじ書房

Perlmutter, D.M. (1979) "Working is and inversion in Italian, Japanese and Quechua" *BLS* 5: 277～324

Pesetsky, D. (1987) "Binding problems with experiencer verbs" *LI* 18-1: 126～140

----------(1995) *Zero Syntax Experiencers and Cascades* MIT Press

Pollard, C./Sag, I.A.(1992)"Anaphora in English and the scope of binding theory" *LI* 23-2: 261～303

Postal, P.M. (1970) "On the surface verb "remind"" *LI* 1: 37～120

----------(1971) *Cross-over Phenomena* Holt, Rinehart and Winston Inc.

Quirk et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language* Longman

Rogers, A. (1972) "Another look at flip perception verbs" *CLS* 8: 303～315

Ross, J.R. (1979) "On declarative sentences" *Syntactic Argument* eds. Napoli, D.J./Rando, E.N.Georgetown Univ. Press

Sells, P. (1987) "Aspects of logophoricity" *LI* 18-3: 445～479

Stroik, T. (1992) "Middle and movement" *LI* 23-11: 127～137

Suzuki, T. (1993) "A lexical-semantic approach to psychological verbs and anaphoric binding" in *Argument Structure* Nakajima, H. (ed.) Kaitakusha

van Hoek, K. (1995) "Conceptual reference points: a cognitive grammar

accont of pronominal anaphora constraints" *Lg*.71-2: 310～340

Wecksler, S. (1995) *The Semantic Basis of Argument Structure* CSLI Publications

Wilkins, W. (1988) "Thematic Structure" *Syntax and Semantics* 21 Accademic Press

Williams, E. (1994) *The Thematic Structure in Syntax* MIT Press

Zbiri-Hertz, A. (1989) "Anaphor binding and narrative point of view: English reflexive pronouns in sentence and discourse" Lg.65-4: 695～727